『平家物語』と『保元物語』『平治物語』との関連

—共通記事についての素材の検討—

亀井依子

〈一〉

『平家物語』巻一から巻六において、保元の乱・平治の乱あるいは『保元物語』・『平治物語』と何らかの形でかかわる記事は、大は実子義朝にだまされて屋敷を連れ出され長々と恨み言を言った後に殺される為義の最期の話（巻一・二代后）から、小は、「神非礼を享給はず」という一言（巻一・鹿谷）まで、実に八十三箇所にも及ぶ。そのうちの十七例は、内容が同じであったり、表現が類似しているもので、重複していると見なすとしても、六十六種類という数になる。

この数値は、『保元物語』『平治物語』に記されている話や表現が『平家物語』にも記されていることを示している。『平家物語』は、治承・寿永の源平両家の争いを描きつつも、その先駆けともなった保元・平治の内乱を物語に取り入れようとしているのである。本稿はその実態の一端を明らかにしようとするものである。

〈二〉

最初に、この三書の関連を共通記事の多寡という点から考察してみる。

先程の八十三の共通記事・共通表現は、

＊『平家物語』と『保元物語』と共通するもの……四十二

『保元物語』金刀比羅本に記事があるもの……三十三

『保元物語』金刀比羅本に記事がなく他の諸本にあるもの…九

＊『平家物語』と『平治物語』と共通するもの……四十二

『平治物語』金刀比羅本に記事があるもの……三十七

『平治物語』金刀比羅本に記事がなく他の諸本にあるもの…五

＊『平家物語』と『保元物語』と『平治物語』と共通するもの…二

と、細分できる。この数値から、大きく二つのことがわかる。

まず、『保元物語』と『平治物語』の『平家物語』との共通記事・共通表現は、ほぼ同数であって、数の多寡という点では差異はない。次に、『平家物語』と『保元物語』の組み合わせ、あるいは、『平家物語』と『平治物語』の組み合わせが共通するのであって、『平家物語』と『保元物語』と『平治物語』三者の共通記事・共通表現はごく少ない。徹底したこの姿勢は、『平家物語』の中で、保元の乱と平治の乱とが別々の異なった意味を持つものと認識されていたことを示している。

もっとも、『平家物語』においては、例えば、

倩平家の悪逆を見るに、保元平治よりこのかた、ながく人臣の礼をうしなう。（巻七　木曾山門牒状）

の傍線部のように、保元以後の世を一括した表現は、保元から寿永の時代が戦乱の世の中という意識で用いられている。絶えて久しい死罪を信西が復活させた話（巻二・小教訓）と、信西が墓を掘って宇治の悪左府の首を実検した話（巻二・小教訓）は、詳述略述の差はあるが三作品に共通する記事の数少ない例である。著名なこれらの話は、信西の生前の所行の報いを語る意味のほかにも、「死罪をおこなへば海内に謀反の輩たえず（巻二・小教訓）」の言葉どおり、

信西の手による死罪の復活が平治以後の戦乱の世を招くこととなった、つまり、三つの乱が一連のものであるという、当時の人々そして三作品の作者の認識をも表している。

〈三〉

『平家物語』も『保元物語』『平治物語』も、諸本の本文異同が激しい。そこで、共通記事の諸本間での異同について見てみる。

『平家物語』の覚一本の「是はさんぬる御葬送の夜の会稽の恥を雪めむが為とぞきこえし。（巻一・清水寺炎上）」の傍線部は、『源平盛衰記』[3]では、呉越の戦いの故事から「会稽の恥」という語の由来にまで話が膨らんでいる。増補系の諸本の延慶本[4]、『源平盛衰記』には、このような多少の異同が見られるものの、小異でしかなく、一つの話の有無といった大規模な異文ではない。『平家物語』に書かれている『保元物語』『平治物語』の記事・表現に関して『平家物語』の四本[5]には際だった差はなく、等質なのである。

また、『保元物語』『平治物語』の代表的な諸本間と『平家物語』（巻一～巻三）との共通記事について、その異同の状況を記事の数で表すと、次のとおりである。

＊『平家物語』と『保元物語』の共通記事

半井本[6]……十九
金刀比羅本……十七
流布本[7]……二十四

＊『平家物語』と『平治物語』の共通記事

九条家本[8]……十六
金刀比羅本……十六
流布本[9]……二十

『保元物語』『平治物語』を通じて、流布本が『平家物語』と共通する記事・素材をより多く持っている、ということがわかる。但し、流布本にだけ見られる共通記事には、「栴檀は二葉よりかうばし（流布本『保元物語』巻上・新院御経沈めの事）」のような諺や短い言いまわしが多い。これは、近世以降という、他の諸本に比べれば遅い時期に作られ流布したと考えられている流布本『保元物語』『平治物語』が、半井本や九条家本・金刀比羅本に限らず、先行する他の諸本等を数多く参考にしたためであろう。この流布本に影響を与えた文献に『平家物語』も含まれていたと考えられる。

『保元物語』と『平治物語』の金刀比羅本は、後日譚がなく、典拠や和歌を取り入れたり、物語的な構成をしたりする点で非常に似ている。にもかかわらず、金刀比羅本『保元物語』が流布本の約七割の記事を有しているのに対して、金刀比羅本『平治物語』は八割を占めている。同じ系統でありながらのこの差異は注目される。

〈四〉

『平家物語』が、保元・平治の乱をそれぞれどのように捉えているかを考察するために、六十六種類の共通記事を記事の内容に応じて整理してみる。

＊『平家物語』と『保元物語』の共通記事

皇室関係の記事……七
源家関係の記事……四
平家関係の記事……八
藤原家関係の記事……六

外国の説話……四
諺、言いまわし……十

・『平家物語』と『平治物語』の共通記事

皇室関係の記事……一
源家関係の記事……八
平家関係の記事……十五
藤原家関係の記事……十三
外国の説話……二
諺、言いまわし……六

『平家物語』と『保元物語』とで共通する記事は、皇室を素材とした記事が多い。『保元物語』は、乱の直接の原因を、近衛天皇による後白河天皇の強引な即位とそれに対する崇徳院の怒りにあると明記している。一方、『平家物語』の叙述は次のとおりである。

「（中略）我朝には、近衛院三歳、六条院二歳、これみな襁褓のなかにつゝまれて、衣帯をたゞしうせ(ッ)しか共、或は摂政おふて位につけ、或は母后いだいて朝にのぞむと見えたり。（中略）」と申されければ、其時有職の人々、「あなおそろし、物な申されそ。さればそれはよき例どもかや」とぞつぶやきあはれける。（巻四・厳嶋御幸）

これによると、近衛院の三歳での即位が天逝と保元の乱という不吉な出来事を引き起こすもととなった、という当時の人々の見解がうかがえる。つまり、『平家物語』の作者もやはり、保元の乱は皇室の内紛に起因した事件である、と捉えていたのである。従って、『平家物語』と『保元物語』との共通記事に皇室関係の記事が多くなってくるのもうなづける。他にも、清盛は崇徳院の乳母子でありながら保元の乱で上皇方に味方しなかったという記事（巻二・教訓状）、遠流にされた崇徳院の御霊が祟った記事（巻三・赦文）、その御霊を宥めるために追号を贈った記事（巻三・赦文）等、皇室に関わる記事が共通記事である。

先程の数値を見る限り、『平家物語』と『平治物語』とで共通する記事は、源家・平家等の家にかかわる記事が多い。しかも、源家・平家・藤原家の間での数の差はほとんどない。ところが、頼朝が伊豆に流された記事は、『平家物語』巻三から巻六の間だけでも五回（巻三・行隆之沙汰、巻五・物怪之沙汰、文覚荒行、福原院宣、巻六・入道死去）も書かれているのである。また、池の尼御前の懇願によって頼朝が助命された記事も、頻出（例えば、巻五・早馬、朝敵揃）している。

このことからすると、『平家物語』と『平治物語』との共通記事には、特に源家に関する話題が多いと言える。確かに、藤原家の人物が保元の乱も平治の乱も起こした。しかし、武士が台頭してきて政治まで動かすようになるにつれて、すなわち『平家物語』に添っていえば話が進んでゆくにつれて、藤原家の影はうすくなってくる。その逆に源家が歴史の舞台で活躍し始める。『平家物語』巻五「早馬」で、伊豆に流されていた頼朝の反撃が始まる。頼朝の活躍がめざましくなるにつれて、頼朝の過去や平治の乱の源家の話題が多くなるのは当然であろう。

『平治物語』は、平治の乱の顚末を語ったものであるが、九条家本と流布本とには、頼朝が平家を滅ぼす、つまり、治承・寿永以後の件までを載せている。金刀比羅本には、これが欠けているが、代わりに、他本にはない夢告の一節がある。

しろかねのうち敷にうちあはびを六七八ほんがほどをかせたまひ、目手にて、「すは頼朝、給はれ」とて御簾のうちよりをしいだされ候つるを、君まいらせ給ひ、このあはびをふつ〳〵とまいりつるが、纔に一本計のこさせ給ひ、「すは守康、給はれ」とてなげいださせたまひ候つるを、（巻下・頼朝遠流の事　付けたり　守康夢合せの事）

この夢告の記事は、源家の一員である頼朝が、後の世に平家に取って代わって天下を手中にする件の伏線となっているわけで、他の諸本に見られる源家の後日譚とその表現は異なるにしても、意味するところは何ら変わりがない。要するに、『平治物語』は、どの諸本も、治承・寿永の争乱の一歩前に位置する源家と平家との争いとして、平治の乱を描いているのである。

『平家物語』が、『平治物語』との共通記事より多く源家にかかわる話を取り上げているということは、『平家物語』の作者もまた平治の乱を源平両家を中心とした争いと捉えていたことでもある。保元の乱が皇室の中における皇位継承の争いであり、源平の武士達は合戦の戦い手に過ぎず、中心とはなりえなかったのに対し、平治の乱は、本質的には源平両家の武士達の戦いであった。そのことが、『保元物語』『平治物語』と『平家物語』との共通記事においても如実に示されているのである。

〈五〉

『平家物語』は、素材の点からも、歴史認識の点からも、保元・平治の乱をそれぞれ皇室・源平両家の争いという認識のもとに扱っている。そしてまた、この認識のもとに、『保元物語』とのかかわり、『平治物語』とのかかわり、或いは両者とのかかわりにおいて、『平家物語』は成り立っているのである。

〔注〕

（1）覚一本を底本とする。テキストは日本古典文学大系『平家物語　上・下』（岩波書店）

（2）金刀比羅本を底本とする。テキストは日本古典文学大系『保元物語　平治物語』（岩波書店）

（3）金刀比羅本を底本とする。テキストは日本古典文学大系『保元物語　平治物語』（岩波書店）

（4）『源平盛衰記』のテキストは『源平盛衰記　上・下』（有朋堂文庫）

（5）延慶本のテキストは吉澤義則氏校注『応永書写延慶本　平家物語』（勉誠社）

（6）佐藤謙三・春田宣氏編『屋代本平家物語　上・中・下』（桜楓社）

（7）山岸徳平・高橋貞一氏編著『保元物語（半井本）と研究』（未刊国文資料刊行会）

（8）日本古典文学大系付録『古活字本保元物語』（岩波書店）

（9）山岸徳平・高橋貞一氏編著『平治物語（九条家本）と研究』（未刊国文資料刊行会）

（10）日本古典文学大系付録『古活字本保元物語』（岩波書店）

本稿は、筑波大学比較文化学類に昭和六十年度に提出した卒業論文の一部である。　（昭和六十年度卒業　元岡山一宮高校教諭）